



なぜ、金正恩^{キムジョンウン}と対話したのか。なぜ、朴槿恵^{パククネ}大統領の弾劾・罷免ののち、新大統領に選ばれたのか。これから韓国政治、そして東アジア情勢はどうなるのか？

——その答えは、人間・文在寅^{ムンジェイン}の苦難の道のりの中にある。

運命 文在寅自伝

10月4日刊行 本体価格2,700円 文在寅 著・矢野百合子 訳 [四六判・並製] ISBN978-4-00-022239-6

「この『運命』という本を、韓国と韓国人を理解しようとする日本の読者の方々に会いたいという、私からの招待状だと思って読んでいただけるよう願っています。古代から日本と韓国をつないできた海上の道のように、日本の読者の皆さんの琴線に触れることができたらと期待しています」

「強風が波を起こすように、両国関係は常に順調に進んでゆくだけではないかもしれません。しかし、私たちがともに育んできた文化と歴史の根源は国民たちの心の奥深くにあって、たがいに近づこうと引き寄せあっています。私たちはやがて真の友人となるでしょう」
(本書「日本語版への序文」より)

「見果てぬ夢を叶えようとする運命の人、文在寅」(姜尚中氏 書籍オビへのコメント)

「彼の人生に韓国激動の現代史が凝縮されている」(蓮池薫氏 書籍オビへのコメント)



■原著は2011年刊行。韓国で80刷以上を重ね、2017年の大統領選前には売切れ書店が続出し入手困難となった自伝の、待望の翻訳。

■大統領自身による書き下ろし「日本語版への序文」を収録。権容奭(クワンヨンソク)一橋大学大学院法学科准教授による「解説」、「文在寅関連年譜」を付加。

■文在寅とは
2017年5月、大韓民国第19代大統領に就任。
朝鮮戦争のさなか現北朝鮮・咸鏡南道から米軍の貨物船に乗り込み避難した父母のもと、1953年に生まれる。貧困生活のなかで名門校へ入学。しかし「問題児」としてたびたび停学処分となる。大学では反独裁政権の学生運動を主導し、逮捕、除籍処分。やがて強制徴収され空挺部隊に入隊。除隊後1980年、「ソウルの春」と同時に大学へ復学、再び民主化運動に参加し、ソウルの留置場で司法試験合格の報せを受ける。司法研修を経て裁判官を志すも、デモ参加を理由に任官拒否され、弁護士の道へ。のちに大統領となる盧武鉉弁護士と出会い、やがて盧政権の樹立により要職に抜擢され、彼の「運命」が大きく動いてゆく――。

〈裏面へ続く〉

■本書の読みどころ

☆韓流映画のようにドラマチックな生涯——「問題児」^{ムンジェア}から「人権派弁護士」へ

民主化運動に身を投じた「ふつうの人」「善き人」が、数々の試練と挫折を乗り越えてゆく。朝鮮戦争、維新体制（朴正熙政権下）、光州民主抗争、1987年6月の民主抗争……歴史的事件を生き抜いたその前半生を通じて、読者は韓国現代史そのものを追体験する。

貧しさのなかで

「貧しさゆえにやりたくてもできないことはたくさんあった。金のかかることは最初から親に言えなかった。いまだに私は自転車に乗れない。家に自転車があったためしがないからだ」「『金はたいして重要ではない』という今の私の価値観は、むしろ貧しさゆえに私のなかに根づいたといえる」（以上、「貧しさ」より）

意外に（？）肌合っていた軍隊生活

「私は学校では皆勤賞しかもらったことがなかった。停学させられたこともある。大学ではどうも除籍され逮捕された。それなのに軍隊では相当に高い評価を受けた。射撃、手榴弾投げ、戦闘水泳など、生まれて初めてやることなのに、自分でも不思議に思うほど結果を出せた」（空挺部隊）

法律家になる

「拘束され（留置所で過ごし）て23、4日めだっただろうか。……うれしい知らせを最初に伝えてくれたのは妻だった。私が司法試験に合格したという。合格発表があることさえ、すっかり忘れてしまっていた」（「留置場で知った司法試験合格」）

☆南北関係の「未来」を読み解く

米国・北朝鮮間の緊張が続くなか、2007年南北首脳会談（盧武鉉大統領・金正日国防委員長）推進委員会委員長を務めた文氏。盧武鉉大統領夫妻が歩いて南北の軍事境界線を越えた、当時の「舞台裏」をエピソードゆたかに紹介。南北会談を真の成果へつなげてゆくために何が必要なのか、自らの経験から学び取った、今日にも通ずる「教訓」が記されている。

米国と北朝鮮の間に立って——

「韓米関係は、南北関係とコインの裏表でもある」（「米国に対する姿勢」）

会談の意義

「実際、五年間ずっと大統領や私たちを苦しめてきたのが北朝鮮の核問題だった」「長きにわたる過程で、忍耐に忍耐を重ねて北朝鮮との信頼関係を積み上げていった、その努力の結晶が首脳会談だった。南北間の平和は信頼によって達成される。たがいに信頼できなければ一歩も前に進み出せない。土壇場で首脳会談を準備しながら感じたのは、私たちと北側との信頼関係が驚くほど厚くなったという事実だった」（以上、『黄色い線を越えて』）

☆故・盧武鉉大統領が導いた「運命」——「ふつうの人」が大統領に

大統領に就任した盧武鉉に乞われ、民情首席秘書官として青瓦台入りした文在寅。弾劾代理人、市民社会首席秘書官、二度目の民情首席秘書官、最後には大統領秘書室長を務める。やがて目撃する韓国政治の深刻な分断と、「政治報復」の実態——「右」と「左」のはざままで孤立した進歩派政権の現実。カリスマ性で熱烈な支援者を生み出した盧武鉉大統領と対照的な、「庶民派大統領」文在寅の政治的ビジョンが示される。

盧武鉉大統領の死

「ミズク岩から飛び降りた——なぜそんなことを」（「その日の朝」）

「その頃の盧武鉉の様子は少し変だった。……いつもなら大きな声で怒鳴って怒りをあらわにする盧武鉉が、ただの一度もそうした姿を見せなかった。……私はそれが奇妙に感じられた。どういって達観などできないことを、まるで達観したかのように受けとめていたからだ。……『私は長い政治生活で鍛えられたが、家族を鍛えることができなかった』とも言った」（「悲劇の始まり」）

分断を乗り越える政治へ

「国民の悲しみを拭う大統領になります。心を通わせる大統領になります。低い姿勢の人間、謙虚な権力となって、最も強力な国をつくっていきます」（本書収録『大統領就任演説』より）

本書についてのお問い合わせは、下記までお願いします。

岩波書店 〒101-8002 千代田区一ツ橋 2-5-5 Tel 03-5210-4000（案内）

編集部：堀 由貴子 horiyuki@iwanami.co.jp、営業部：大矢一哉 oya@iwanami.co.jp